

コロナ以降に教会が目指すべき方向

巖善一

1. はじめに

世界はコロナウイルスによって今まで経験したことの無いことがたくさん起こり、混乱し続けている。未だに治療薬が見つからない状況の中で何かを新しく計画するのは難しい。国家、社会、企業、病院、家庭などがコロナによって不安感を持っている。教会も例外ではない。これから公の礼拝、各種集まり、伝道、そして主日のプログラムをどのように行うべきか迷い、悩まずにはいられない。韓国の多くの教会がこのような悩みを持ち、教団の会議やセミナーを通して突破口を探そうとしているが、今の所、明確な解答を探し出せずにいる。韓国の大部分の教会が方法を探し、自分たちなりに実行してはいるが、しっかりとした方向を探し出せず、困難な時を迎えている。

日本の教会は韓国の教会よりもっと深刻である。礼拝人数が20名にも満たず、高齢化が進んでいるためオンライン礼拝も簡単ではない。スマートフォンを使っていない教会員がいたり、持っていたとしても非常に小さいスマートフォンで礼拝を捧げることは難しい。そのため既存の聖徒たちのみ、部屋を開放し、距離を置いて礼拝を捧げる教会もあれば、完全に家族礼拝を勧めている教会もある。日本の教会の80%以上が60代以上の牧師であるので、ある程度以上の規模の教会を除いて、オンラインシステム構築にも高い壁が立ちほだかる。結局、教会の聖徒が多いか少ないかに関係なく、教会が大変に

なった時に力になってくれる働き人がどれほどいるかが肝心なのである。小規模であろうと大規模であろうと、これからは大きな集会を通して行われる使役は減らすしかないため、小グループの活性化と少数精鋭の弟子化により力を入れなければならないのは明らかである。ビリー・グラハムが “我々の世代の世界福音化に大きな影響を及ぼした本 책”¹ と話したロバート・コールマンの “主の伝道計画” を中心にコロナ以降の日本宣教の方向性に対して詳しく見ていきたい。

2. コロナウイルスを通して見る教会の状況

以下は 2020 年 6 月 15 日 オンヌリ教会で開催された “コロナ以降の韓国の教会大討論会” を 通して統合 牧師 1135 名を対象に調査した内容を報告している。²

1. コロナによって教会の献金に変化があったか？

献金が減った 68.8%

変化なし 30.1%

増えた 1%

2. コロナ以降、最も大きく変わったことは何だと考えるか？

出席教会員数の減少 29.6%

小型教会が大変である 16.7%

オンライン礼拝/オンラインコンテンツ強化 15.3%

¹ ロバート・コールマン/洪ソンチョル 訳、『主の伝道計画』,(いのちのことば社, 2011), 7

² 大韓イエス教長老会総会 “コロナ以降の韓国教会 大討論会”,

http://new.pck.or.kr/bbs/board.php?bo_table=SM05_01_17&wr_id=1, 2020 年 6 月 24 日 検索

3. コロナが終息した後、出席教会員の数はどうなると思われるか?

減少するだろう 49.2%

変化しないだろう 40.8%

増加するだろう 5.3%

わからない. 4.6%

4. コロナ以前のように回復するためには終息後、どの程度かかると思うか?

1年 33.3%

6ヶ月 28.4%

回復は困難 18%

5. コロナを通して韓国の教会に起こる肯定的な変化があるか?

現場での礼拝の重要性を経験 44.2%

牧会者の牧会方式/牧羊を振り返る機会 11.2%

生活の中での信仰の重要性の認識 9.8%

オンラインシステム/コンテンツの開発 7.7%

6. コロナ事態を経験し、韓国の教会が最も関心を傾けるべき主題は何か?

礼拝の本質を立て直す 43.8%

教会中心の信仰から生活中心の信仰の強化 21.2%

教会の公的役割 12.9%

オンラインシステム構築と多様なコンテンツ開発 6.9%

7. コロナ終息以降、牧会の重点をどこに置くべきか?

説教力の強化 19%

聖徒間の交わりと共同体性の強化 18.9%

礼式、礼典 及び 集まる礼拝の強化 16.5%

教会の公共性と地域社会への仕え 及び 訪問/伝道の強化 8.7%

8. もしオンライン教会が生まれたら、公の教会として認めますか？

認めない 65.3%

認める 22.2%

わからない 12.5%

9. コロナで最も辛い点は何ですか？

教会員たちの主日を必ず守るという認識 及び 所属感の弱化 39%

財政問題 20.8%

次の世代の教育問題 15.3%

オンラインシステム構築の大変さ 10.1%

特になし 8.7%

上記の統計を見るとほとんどの牧会者たちは礼拝と財政に対して深刻に悩んでいることが分かる。そのためオンライン礼拝やオンライン献金などを対策とし、模索している。しかしこれは根本的な解決というよりは補助的な補完の手段に過ぎない。



上の写真はある教会の真実な執事が数週間オンライン礼拝を捧げた結果、父親のこのような姿に失望した娘が写真を撮り、担任牧師に送ったものである。朝早く教会へ行き、教会の固い部分も嫌がることなく、主日礼拝を命のように守っていたこの方もオンライン礼拝の前にはただの弱い聖徒であった。

アメリカは他のどの国よりラジオ、テレビ、youtube が普及している国の内の一つである。それにもかかわらず、クリスチャンニュースによれば最近 10 年間で礼拝出席者数は継続的に減っている。³ 主日テレビでは一日中、多くの牧師たちの説教が流れている。最近では大画面のテレビまで登場し、あえて大きな教会で画面を通して説教を聞くより、楽に礼拝を見ることができる。1920 年代にラジオ放送で説教が開始され、放送媒体が宣教や伝道の役割を担ってきたのは事実であるが⁴ これは一度も福音を聞いたことが無い国や地域に福音を伝えるための手段であって、礼拝の代わりとしたり、教会の本来の役割を担うと考えるのは難しい。

³ クリスチャンニュース、『アメリカ教会 礼拝出席率 10 年間 継続的に減少』、
<https://www.youtube.com/watch?v=mXR4GEjRLHw>, 2020 年 6 月 24 日 検索

⁴ ルーズ・ターカー、, 『宣教師 列伝』, (クリスチャンダイジェスト, 2005), 490

3. 現代の教会が抱えている問題

大型教会の場合、最近コロナ患者が減っていき、公の礼拝を今まで通り再開したが、未だに礼拝者の回復率が 50%~60% 程度しかないと言われている。このような現状は小規模教会でも似たり寄ったりで、大きな違いは見られない。ではこのような状態がいつまで続き、なぜこのような現象が起こるのか？様々な問題があるが、根本的な問題を掘り下げてみると、一つの教会に根を下ろすことができず、主日礼拝と適当な距離を置いて信仰生活をしている聖徒が多いからではないかと考える。ダラス・ウィラドは『失われた弟子道』で“今日、信じていると言っているクリスチャンの間に根付いている支配的な考えは、私たちが絶対に弟子にならなくても永遠にクリスチャンでいられると信じているということである”と語っている。⁵

教会が弟子化された聖徒ではなく、組織の一員として管理しているために出てくる結果であると考えられる。教会で牧会というのは、いつからか聖徒を養育して弟子化することではなく、組織を作って管理することだという誤解が始まった。そのため教会には多くのプログラムが存在する。できるだけ聖徒が平日にもそのようなプログラムに参加するように勧め、教会のことに関心を持ち、教会の組織の一員となることができるように願っている。伝道プログラム、社会奉仕プログラム、教会奉仕プログラムの一員として教育する。しかしこれは短い間組織を維持するためのものであって、よく見てみると弟子を養育するものとは言えない。

ロバート・コールマンは“私たちが教会で伝道プログラムを一つ二つ推進しようと忙しくしているのは否定できない事実だ。しかし果たして私たちは目的を達成しているだろうか？”と尋ねている。⁶

日本でも伝道プログラムがどれほど多いことであろう。英語教室、韓国語教室、食べ物バザー、ゴスペルライブ、映画視聴、セミナーなど。使役者は聖徒たちとチラシ、広

⁵ダラス・ウィラド、『失われた弟子道』,(祝福された人, 2013), 12

⁶ロバート・コールマン/洪ソンチョル 訳、『主の伝道計画』,(命のみことば社, 2011), 15-16

報誌、招待イベント準備など多くの時間をこのようなイベントのために割いている。日本人たちは徹底的に準備する。ある程度で話しを進めていかないと会議時間も長い。普通一つのイベントの準備のために短くとも3か月から6ヶ月かけて準備を行う。このようにイベントを通して繋がった魂たちを養育し、訓練していかねばならないのに、もう一度管理し、準備するシステムに戻ってしまう。教会員たちは教会のイベントの奉仕をする人力に過ぎない。それにもかかわらず使役者や教会員たちはすべての伝道に力を尽くしているのに、自己満足とやりがいを感じている。しかし時間が経てば経つほど聖徒たちはやるべきことはやったということで休むことを考え始め、少しずつ教会と距離を取る傾向にある。結果全てのプログラムを使役者一人で抱えることになり、その有り余る使役量のために途中で投げ出したり、使役者が倒れたりしてしまう。実際に若い牧師が責任感を持って既存のプログラムを一人で遂行しようとして、突然病気になってしまう場合を見たこともある。

ではこのような悪循環が繰り返されている現状にどのように終止符を打つことができるか？コロナ以降の時代はこのようなプログラムやイベント中心の使役はどんどん難しくなるであろうが、どうすれば教会が教会らしく集まり、使命を果たしていくことができるか、もう少し具体的に考えて行こうと思う。

4. コロナ以降に備えて、ふさわしい教会の姿

イエス様の方法はプログラムやイベントではなく、人であった。それも多数ではなく少数の12名を選んで、彼らを養育・訓練なさった。未熟で弱く、足りないところも多かったが徹底的にイエス様は12名に集中なさった。3年という時間は長いと言えば長いし、短いと言えば短い。もし教会を開拓して3年間で12名の聖徒を相手に使役をしていると考えてみよう。素晴らしい使役をしていると考える人はほとんどいないと思う。残念に思ったり、憐れに思ったりする人々がほとんどではないだろ

うか。周りから様々な違う使役や違う仕事をたくさん勧められるだろう。しかしこのような働きがまさにイエス様の弟子使役であった。イエス様は十字架にかかれて亡くなられる時、3年間の苦労が水泡に帰すように全ての弟子が裏切り、逃げて行った。こう考えるとイエス様の使役は失敗だと言う他ない。しかし3年間の使役の実はイエス様の復活と共に聖霊降臨によって大逆転した。一瞬で3千名が改心し、主の元に戻るはたらきが起こった小規模の初代教会の姿を見ることができる。⁷ またこのようなりバイバルを聖徒や教会員が増えたと言わずに、弟子たちが増えたと言聖書には明らかに記されている。⁸

ロバート・コールマンは“少数の平信徒を選ぶだけでなく、彼らと効果的に働くことができるように、グループを小さく維持する必要性が明らかにある”と強調している。⁹ 教会がこれから教会として存続し、その役割を担っていくためには小グループ中心の共同体、1人1人を組織の中の一人ではなく、イエス様の弟子として養育し、訓練しなければならない。

ファン・カルロス・オルティンズは‘弟子ですか’の中で、教会の牧師は、霊的な子供一人を非常に厳しく叱る時、その霊的子供が他の孤児院へ逃げてしまうのではないかという思い煩いのため、彼を養育することができないと話している。¹⁰ しかしこれは最初から信頼関係があればこそ行うことのできるものであって、突然厳しく叱れば当惑し、プレッシャーを感じるに違いない。筆者もこのような経験があるが、徹底した信頼関係の中で感謝を持って受け入れることのできる準備が整った時に可能なのである。それほど一人の人を養育し、育て上げることは大変なことである。時間がかかり、多くの費用と努力が必要である。教会は網でかき集めるように教会員を集める所ではない。一人ひとりをしっかりと、徹底して確認し、点検し、養育しなければならない。両親が子

⁷使徒言行録2章42節~47節

⁸使徒言行録6章1節

⁹ロバート・コールマン/洪ソンチョル 訳、『主の伝道計画』,(命のみことば社, 2011), 31

¹⁰ファン・カルロス・オルティンズ, 『弟子ですか』,(ツランノ出版, 1996), 131

供を養育する時とよく似ている。イエス様さえも公生涯の2年目の途中で群れを見ながら、ついてきやすい人数に限る必要が出てきた。これにイエス様は“弟子を呼び、その中から12名を選び、使徒となさった”¹¹とおっしゃった。

教えを受ける集団の大きさが小さくなればなるほど効果的な指導ができる機会が多くなるとロバート・コールマンは語る。¹²これはイエス様だけが特別だというのではなく、主の戦略であり、主がノアを選ばれ、アブラハムを選ばれ、ダビデを選ばれるように一人の弟子に特に集中なさったことを我々も見ることができる。

多くの教会が弟子訓練という用語を使っているが、実際には弟子訓練というよりは教育プログラムと言ったほうがふさわしい。修了証がばらまかれているこの時代に実際にイエス様の弟子らしい弟子がたくさん見られないというのは笑うに笑えない。

ジョン・ストットは“全ての弟子道の基本は、イエス様をふさわしいあだ名で呼ぶだけでなく、その方の教えに従い、その方の命令に従順すると私たちが決心することである。”と言っている。これはイエス様が“持ち物を捨てないならば”¹³，“家族よりイエス様を愛さないならば”¹⁴，“自分の十字架を背負わないならば”¹⁵ 弟子ではありえないとおっしゃった御言葉と非常によく似ている。

弟子養育を最初から高い水準で教え、導かなければならない。最初から相手にすべてを合わせて養育しようとするれば、使役者は羊に引きずられる牧者のようになってしまう。結局行く道を失い、羊と共に牧者も迷うことになる。高い水準の弟子養育に賛同する真

¹¹ ルカによる福音書 6 章 13 節-17 節

¹² ロバート・コールマン/洪ソンチョル 訳, 『主の伝道計画』, (命のみことば社, 2011), 33

¹³ ルカによる福音書 14 章 33 節

¹⁴ マタイによる福音書 10 章 37 節

¹⁵ マタイによる福音書 10 章 38 節

の弟子たちを育て上げることが、コロナ以降に切に必要なことである。デイビット・ワトソンは以下の 21 の質問を通して弟子としての資質を点検するよう話した。¹⁶

- 1) 喜んで仕えようとしているか
- 2) 喜んで聞こうとしているか
- 3) 喜んで学ぼうとしているか
- 4) 他の人からの忠告を喜んで受け入れているか
- 5) 目上の人々に喜んで服従しているか
- 6) 他の人と自分の生き方を分かち合っているか
- 7) 謙遜を喜んで学ぼうとしているか
- 8) 他の人を批判する前に自分の人生を喜んで診察しようとしているか
- 9) 自分の弱さを知っているか
- 10) 自分は完璧主義者か、他の人をよく罪に定めてしまうか
- 11) 人を赦せるか
- 12) 根気があるか
- 13) 人から信頼されているか
- 14) 自分のことにのみ気を使う方か、他の人の人生に犠牲しようとして関心を注いでいるか
- 15) 小さなことにも最善を尽くしているか
- 16) 自分の余暇の時間をどのように使っているか
- 17) 最優先であり究極的な目標が主を喜ばせるためであるか
- 18) 主の御言葉に心底従順しているか
- 19) どのような状況でも主に対しての信仰を諦めないか
- 20) 自分の避難所はどこか
- 21) 自分のすべてが主を認めているか

¹⁶ デイビット・ワトソン, 『弟子道』, (ツランノ出版, 2004), 96-99

多くの使役者が試行錯誤を恐れる。弟子養育に一度や二度失敗するとすぐに聖徒たちを集めることだけを考え始めてしまう。もちろん理解はできる。現実的な問題がすぐ目の前にあるためである。教会の維持や生活のための財政的な問題がすぐ目の前にちらつくので、すぐに妥協してしまう。しかし忍耐しなければならない。何年かの苦勞が未来の働きにどれほど大きな力となるかを期待し、成し遂げていかなければならない。

筆者も靈的に瘦せた日本の地で使役をしながらどれほど試行錯誤を繰り返したかわからない。しかし弟子養育に全てを懸けた。浜松という所で開拓して最初の2年間はやってもやっても結果が出なかった。一人の魂の重要性をどの時よりも切に感じた。しかしそのような中で一つの家庭がつながり、力を得た。徹底的に御言葉中心で一人の弟子養育に力を注いだ三年目、三階建ての建物を得ることができた。融資によって購入し、3年半で全ての融資を返して自立し、主の弟子がしっかりと育ていった。全9年間のはたらきを行い、日本人夫婦の使役者に恵みの中で移譲した。ここでも同じである。一人ひとりを弟子養育すればコロナによって共同体や集まりが大変ではない。むしろコロナを通して自分の信仰を振り返り、より成長するきっかけとなるためどれほど感謝かわからない。

ジョン・パイパーは “コロナウイルスと関連した主の目的は主の民が自己憐憫や恐れを捨てて、危険の中でも一生懸命に善を行うことである” と言った。¹⁷ 165年 恐るべき疫病がはやった時、ユリアヌス皇帝がこのような手紙を送ったと言われている。

“クリスチャンたちが親しくもない人に対しても愛し、仕え、死んだ者たちを葬るのを助け大きな勢力を拡大してきた。乞食となったユダヤ人が一人もいないという事実と不敬なガリラヤ人(クリスチャン)が彼らの中の貧しい人だけでなく、我々の中の貧しい者まで顧みているという事実は非常に遺憾である。我々は我々に属する人々に助けを施さなければならぬができないでいる。”¹⁸

¹⁷ ジョン・パイパー, 『コロナウイルスとキリスト』, (改革実践社, 2020), 110

¹⁸ <https://kuyrian.tistory.com/222>, 2020. 6. 25 検索

今の時代のクリスチャンが初代教会の聖徒たちのような犠牲と献身の弟子の道を歩めないなら、コロナ以降の教会はより居場所が無くなり、影響力が薄れていくだろう。教会がこのような緊迫した状況であることを直視し、主の弟子を生む教会、その弟子が再び主の弟子を生む働きを行わなければならない。まだ遅くない。聖霊様は万事が益となるようにしてくださる方である。

5. おわりに

最近小規模共同体に関して関心が今までよりも熱い。大きな教会も分立、牧場、セル、管などの体制をより強化し、補強しようと力を注いでいる。このような教会の姿に向かって歩もうとする努力は悪くない。しかしもう一度強調するが、コロナ以降の教会の課題はシステムに対するものではない。根本的な問題を解決せず、形態の変化だけを追求するならば教会の共同体がどんな姿をしていても同じ問題がいつも発生し続けるほかない。雰囲気や個人的満足のための共同体ではなく、明確な人生の目標と使命感を持ち、信仰と共同体を守ることでできる弟子たちが出てこなければならない。6.25 の時や日本帝国の支配の時代に命を懸けて共同体と礼拝を守った信仰の先祖たちを思いだし、これから韓国の社会でぶつかるであろう霊的攻撃や妨げの前にコツコツと、大胆に世に正面からぶつかって歩んでいくことのできる主の弟子や共同体を作って行かなければならない。これは主がわたしたちにイエス様を通して下さった特権であり、祝福である。このような主の弟子が教会で養育され、訓練を受ければ、どんな形態の集まりや礼拝でもまことに守りきることができ、どんな大変なことの中でも揺れることのない共同体になるであろう。そしてコロナ以降にも訓練された弟子たちを通して必ず教会に希望があることを世の中は見ることになる。